

総務常任委員会記録

平成 30 年 6 月 27 日(水)午後 3 時 9 分～午後 4 時 18 分(9 階 909 会議室)

○出席委員(7名)

委員長	小松 良行	副委員長	阿部 亨
委員	羽田 房男	委員	小野 京子
委員	土田 聡	委員	粕谷 悦功
委員	宍戸 一照		

○欠席委員(1名)

委員	萩原 太郎
----	-------

○議題

1. 所管事務調査について
2. その他

午後 3 時 09 分 開 会

(小松良行委員長) ただいまから総務常任委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりでございます。

初めに、所管事務調査についてを議題といたします。

その前に報告なのでございますが、6 月定例会議最終日、正副議長並びに経民、そして建設水道正副、私どももですけれども、市長に対して所管事務調査の結果の提言書を提出してまいりました。その中で市長さんから提言に対しお言葉をいただいております、一部ご紹介したいと思っておりますが、総務常任委員会に対しましては、機能別消防団員の導入については提案のとおり、画一的ではなく、地域の実情に合わせた導入の検討は必要との認識であるよということであったり、学生団員については大学との連携についてはこれからもこれは重要といった認識を示されておられました。

また、後段のほうに消防本部建て替えの際の防災学習施設なんていうようなことあったのですけれども、消防団の PR ブースのこういった設置については市単独で行うというのはなかなか難しいでしょうと、県単位で 1 個ぐらいあれば本来よいものではないかと国のお役人みたいな回答だったのでございますけれども、市としては日々の教育の中で高めていくといったソフト面の対応を重視していくということも考えを述べられておられました。でも、そうはいうものの慎重に検討していきたいということでありまして、3 つの常任委員会を通じた全体の意見としては、今後公共施設再編等々の議論もあるように課題が山積しておると。プラスアルファといった事業で私どももいろいろ提言する中では、なかなかかなえられないものも出てきますと、正直な見解かというふうに思いますけれども、

議会についても要望ばかりでなくて、スクラップ・アンド・ビルドといった議論に際しても考慮していただけないかというお話もございました。あくまでも意見交換というようなところで市長のご発言でありましたが、至極ごもっともではありますけれども、そのような3常任委員会からの市長に対する要望という状況でございましたことをまたご報告申し上げます。

では次に、前回の委員会で新たな所管事務調査の調査項目について皆さんからいただいたご意見を正副委員長手元で精査させていただきましたので、ご説明をさせていただきます。

テーマは、広報政策についてとしてみました。主に調査項目としては、前回小野委員からご提示いただきましたシティープロモーションについて、そしてそこからつながります、定例会議中でも質問で話題となりましたところでしたが、市として全庁的に広報というものをどのようにしていくかというところで、現在の本市の広報戦略についても調査してはいかがかと考えたところでありました。

そこで、お配りしております福島市の広報戦略をごらんいただきます。お手元にお配りしましたまま福島市の広報戦略をごらんいただきたいと思います。2ページ目でございますけれども、広報の目指すところですが、広報戦略では広報を目的別に分類しまして、1番目として市民生活に直結する生活広報、(2)として災害発生時の危機管理広報、(3)で市内外への魅力発信の魅力発信広報の3つに分かれてございます。そのうち魅力発信広報がシティープロモーションの一環とされておるところでございます。

また、危機管理広報については、当常任委員会では、総務常任委員会でございますけれども、危機管理体制の現状の確認など必要と当然されるわけなのですが、これは所管をちょっと外れてしまうということが想定されることから、この3つのうち、3つ全部ということではなくて、ちょっとこれは本常任委員会だと難しい面がございますことから、(1)、(2)といたしますか、生活広報について、これは市民生活に最も密着しているもののために調査をしていくということで、魅力発信、それから生活広報という2つに絞って調査を進めればよいのではないのかなと考えたところでありました。

そして、資料1のほうをちょっとごらんいただければと思うのですが、調査の目的でございますけれども、このようにしてみました。2020年には本市でオリンピックの野球、ソフトボールが開催され、競技関係者や観客のみならず、多くの報道関係者も訪れてくることが予想されることから、また4月には中核市に移行し、保健所業務など市民生活に直結する業務が以前よりも増加、市民にわかりやすく効果的に情報を伝える重要性も増してきているのではないかと考えられます。そのため、本市全体で市の魅力を内外に発信するためのシティープロモーションや目指すべき広報のあり方などを調査し、市の事業の効果をより高めることを目的としてはいかがかと考えたところです。

調査方法、調査時期については、記載のとおりでございます。

ここまでについてですが、まず委員の皆さんからご意見を頂戴したいと思います。

何かありましたらご発言いただければと思います。

(土田 聡委員) さっき常任委員会の所管から外れるといったところというのはどういう意味で言っ

たのでしょう。

(小松良行委員長) この3つの生活広報、危機管理広報、そして魅力発信広報と3つありますけれども、(2)の部分についての危機管理広報の部分であります。危機管理室がうちの所管でないといったところから、まず所管事務調査をするにあたってもおやおやということになってしまうかなと、それが一番大きな理由でした。どうしてもここまとめていくということになってくるとちょっと所管違うのではないということになってしまうことから、市民生活ということの広報、市政だよりや、そして一番本市としても今後魅力発信広報というところに力を入れていきたいといった思いもあるようですし、本常任委員会からも委員のほうからシティープロモーションについてどうかといったご意見もあったことから、この2本立てでどうかななんて思ったところだったのです。

何なりと。どうぞ、小野委員、何かありますか。御意に沿うように一生懸命正副で考えてみましたけれど。

(小野京子委員) これは大事なことなので、いいと思います、この内容で。

(土田 聡委員) (2)の危機管理広報は危機管理室とあれだなんて言っているけれども、(1)の生活広報は市民安全部みたいな、(3)は商工観光部とかぶったりするから、全部だめになってしまうのではないかな。だから、目指すところというのは我々やるのは大きな3番の基本戦略の戦略1から戦略3をどういうふうにしていくかということだと思う。その一つ一つが(1)から(3)だと思うのだけれども、一応私らは所管として戦略1から戦略3の部分、戦略1だったら広報の目的、目標を明確にするという意味では、これは観光でも危機管理でも生活広報でも一緒、同じことだから、そう考えると余り(1)から(3)とかと考えないで、大きな3番の戦略1から戦略3のところではいろいろ考えていったほうがいいのではないかなと思うのだけれども。今みたいに所管がかぶるなんていうところ全部やられなくなってしまうのではないかな。3番の基本戦略のところを調査の中身として、あと(1)から(3)はそれぞれの所管があるから、そういう感じのほうがいいのではないかなと思うのだけれども。

(羽田房男委員) いずれそういう形にならざるを得ないと思うのです、土田委員がおっしゃっているように。これについて例えば東日本大震災災害というふうになってしまうとアウトになってしまうので、おっしゃったように3ページの3の基本戦略、全体的に広報というのはどうあるべきなのかという基本的な考え方という。でないと、それしかないと思うのです。よく地域で言われるのは、わからなかったと言われるのです。この間市政報告会するときにもあるところで税制が変わって、何で広報しなかったのだかといって怒られたというのです。それは、前にも私も言われたことあったのだけれども、何月号の市政だよりに書いてありましたよと言ったらまた怒られたわけ。ばかにしているのかと。だから、本当に市民の皆さんというのは自分の興味のあるところは見たり聞いたりするのだけれども、ちょっと余り関心がないやつというのは書いてあるのも何もわからないというか、目に入らないというところもあるので、やはり市の広報というものをどういうふうにわかりやすく市民の皆さんに受け

とめていただけるのかなという基本的な考え方というのが非常に問われているような気がするのです。

(小松良行委員長) ありがとうございます。この調査目的を専ら小野委員のほうからシティープロモーションといったことがあると、それらの魅力発信ということに対するご意見に対して、そうなるべくと、先ほど来からのお話になってしまいますけれども、観光振興みたいなことの方向性に余りにも行き過ぎると、これはちょっと本来でないだろうと。やっぱり総務常任委員会としては広報政策という捉まえ方をする中で、現状平成28年11月策定の広報戦略、こちらを見た際に広報の目指すところとしての(1)、(2)、(3)というのがありまして、これらをどのようにしていくかということから、この戦略1、戦略2、戦略3ということから、この戦略1、戦略2、戦略3ということをして調査目的というのだと何とも争点がわからない。ある程度現状の事業や今後を見据えて必要な広報のあり方というふうなことを後ほど目的に据えていかないとかなということから、基本的にはこれらを達成するための(1)、(2)、(3)の目的を達成するためにこういった戦略1、戦略2、戦略3ということをしつかりと見据えて取り組みを行っていく必要があるのだろうなというふうに読み解いていたところだったので、ただいまの調査の目的といったところでは、当然これが重要になってくることは理解するところであります。

(小野京子委員) シティープロモーション、市の魅力というのはあるのですけれども、一番はどういうふうなまちの広報活動がどうなっているのか、どういふふうになればよくなるのかというのがやっぱり大事だと思ったのです。前も委員会の中でテレビの広報の時間帯、郡山は夕方みんな見る場所、福島は安いところの昼間の前とか、そういう媒体の使い方が本当にこれでいいのかと、お金をかけてやっているのに、見ない時間帯にお金かけて流しているというのはどうなのかという媒体も基本戦略にもあるのですけれども、そういう現状と広報のやり方というか、あり方というか、そういうものも大事でないかなと思うので、こういう調査が必要でないかと思っています。

(小松良行委員長) こういった調査の目的を踏まえて調査していくにあたっては、当然市当局のほうからは今後この広報戦略についての当局説明などいただく機会もありますけれども、より現状と今後に向けてというところでは、きっと基本戦略というのは基本的には方向性として間違いがないというふうに思いますけれども、今後に向けてというところではまだまだただいま小野委員からあったように、改革、変革が必要な点も多々あるかという中において、特に調査目的として広報戦略を見たときに、生活広報、それから魅力発信広報というところに少し絞って調査を進めていくというところではどうなのかなというふうに思ったところですが、そのほか何かご意見ございますか。

(粕谷悦功委員) 福島市の広報全般についての調査なのだね、これ。

(小松良行委員長) そうです。

(粕谷悦功委員) 生活広報と魅力発信広報という2つのことで、例えば所管事務調査をした場合に危機管理の広報というのはどこがやるようになるのだい。これは、危機管理室がやるの。それは、広報活動は全体的にこういう危機管理広報というけれども、危機的な状況が生じた場合の広報のあり方は

どうあるべきかと。それと、福島市の魅力を発信する広報のあり方はどうあるべきかと。それと、一般的に福島市がいろいろ取り組んでいる情報発信、広報というかな、これはどうあるべきかということで、広報全体として福島市の広報政策について調査するわけだから、危機管理は市民安全部だな。だから、危機管理のときの広報というのは市民安全部が、所管が取り組むのかということなのだけれども、これはやっぱり福島市の危機管理室が全部取り組む内容になっているのではないのかな。ちょっとわからないけれども、広報については。単独で所管ごとに広報、それは商工観光で一部やっているけれども、基本的な考え方というのは、福島市の考え方ということがあって、それぞれの所管がその内容に基づいて広報を所管でやるべきものを所管でやっているという形になっているのではないかと思うのだけれども、その辺どうなのかな。広報活動だから。福島市の広報戦略というのに1、2、3と出てきているのだね。

(小松良行委員長) はい。

(粕谷悦功委員) そうすると、広報戦略としてこの広報戦略に取り組む所管はどこになっているの、これ。総務なのでしょう。総務所管。

(小松良行委員長) 総務所管です。結局そうですね。

(粕谷悦功委員) だから、これは危機管理広報というけれども、そういう危機的な状況が生じた場合の広報のあり方はどうあるべきかということなので、震災が発生したとか、地震があったとかということではなくて、一般的にそういう危機的な事象が発生した場合の広報のあり方はどうあるべきかということだから、これは別に全部一緒ではないのかなと思うのだな。

(羽田房男委員) 当局の説明求めたら。当局の説明求めてもいいのではないのかな。

(粕谷悦功委員) 当局が説明するでしょう、全部。

(土田 聡委員) 今さっき小野さん言ったようなテレビの時間帯なんていうのは基本戦略の中で書いてあるのだよね。広報媒体の問題で書いてあるし、あと3つの(1)から(3)の各目標について、例えば広報目標を明確にするというのは、所管は違うけれども、目的は一緒。そういう意味では、取り仕切る部分は総務でやっているから、ここであれば全部網羅できるから、余り所管外だということ関係なくできるはずなので、戦略1から戦略3を中心にやっていったほうが、余りこれは所管だ、これは所管外だということ関係なくできるのではないかなというふうには思うのです。ちょっと複雑にはなるかもしれないけれども。

(小松良行委員長) 確かに調査の領域が、所管するところは1本でいいのですけれども、この戦略についてということ、広報戦略ということですから、いいですが、これを突き詰めていくところに3つの項目立てが出てくる。それぞれについてお調べし、提言まで持っていくといったときのことまで考えてしまったということは当然あるのと、小野委員のほうからご意見があったのは、シティープロモーション、福島の魅力発信というふうな点でのご意見が強かったことから、しかしながらというところでシティープロモーション1本に絞ってしまい過ぎたら今議会を顧みても広報の取り組みといった

ところも非常にあることですし、市民生活といいますか、こうしたところとあわせて取り組みについて調査し、提言できたらいいかなというふうにちょっと流れを考えたところで、特段の理由でというわけではないですけれども、危機管理広報、3本立てでやるとしたら。

(粕谷悦功委員) 危機管理広報というのは、他自治体に危機管理時の広報なんていうのがあるかどうかの問題なのだよな。たまたま福島は大震災とか放射能の問題があつてこういう広報なんていう言葉になっているけれども、果たして自治体でほかでこういう広報をちゃんと確立しているところあるのかな。魅力発信というのはどこでもやっている話。生活広報というのももちろん市政だよりを配布したり、そういうことの中でより市民にわかりやすい、市民が広報に非常に興味を持つようなやり方とか、そういうのはわかるのだけれども、危機管理広報というのは福島以外でもこんな広報やっているところあるのかな。どうなのかわからないところなのだな。

(小松良行委員長) 今のお話も大変重要なところで、大概危機管理に対しては市民が警報として、啓発として受けるということで、災害発生時ということは東日本大震災や放射線の影響等々があつたことから、その重要性が本市の場合は当然、本市のみならず被災3県についてはクローズアップされている点はあるかというふうに思うのですけれども。

(粕谷悦功委員) 調べるにも調べられないな。ほかでないと、ほかでどんなことやっているかわからないと調べようないのだよな。うちの当局から聞く内容で。ほかは多分どこでもやっている話。魅力発信の広報活動なんていうのはいろんなところで多分やっていると思うのだ、他自治体も。調査はしやすい。その辺がわからないところだな、危機管理広報というのは。いずれにしても、こういうことはやらないといけないのだけれども、ほかでこんな広報やっていないのではないの。わからないね。福島独自のなのかな。

(小松良行委員長) ほかにご意見ありますか。

先ほど申し上げましたとおり、さきの委員会の中でシティープロモーションについてというご意見をいただいたことから、どのような所管事務調査の目的にしていこうかということで正副で考えていたところだったのですけれども、その中で広報戦略と、皆さんも手元にあります資料でございますけれども、こうした戦略のもとに今現在進められてきていると。今後というところで本市の広報の目指すところに対して調査、そして私どもが提言していくといった場合に、シティープロモーションとあわせて市民生活に直結するところの生活広報というくくりの方が正直言ってやりやすい、あと先ほど粕谷委員のほうからもご意見いただきましたけれども、危機管理広報ということになると、所管という問題もありますが、実際にこれをどう伝えていくかというようなところでは他市の事例を見るにはなかなか難しい。危機管理については、広報というよりも危機管理に対する啓発であつたり、警報とか、そういった分野ということにどうしてもなってくることから、それとあとまとめていくにあつて3本の取りまとめといったことになったときに非常に難しい時間的な問題も出てまいりますし、魅力発信というものを中心に、そしてあわせて生活広報というものを充実していこうという2段組みで

何とかできないものかなというふうに考えたところでありました。

ほかに何かご意見いただけますか。

(**宍戸一照委員**) まずはおくれて来て済みません。前段の部分の話が、流れがわからないので、途中で口挟むことはできませんので、あれですけれども、ただ後のほうの今の委員長のお言葉を聞くと、魅力発信と生活情報発信とか、そういうような部分においてはいいのかなと。ただ、シティープロモーションとなると私の考えとしては、やっぱりまちづくり政策と一貫して魅力を発信していくというもうちょっと大きな話になるので、範囲を捉えにくくなってくると思うので、委員長がおっしゃったような生活とか魅力発信という部分での、その辺に絞ったほうがわずかの期間では話決めやすいのかなというふうに思うところで、あと先ほど来粕谷さんと同じ危機管理というのは、これは震災のときにも私とか粕谷さん同じ総務委員会として、福島市が情報発信とか情報伝達とかうまくいかなかったということにおいて、やっぱり自己反省という部分においてここに危機管理広報というのが出てくるのかなというふうに思うところなのですけれども、粕谷さんおっしゃったように、なかなか他市においてはそこまで危機管理広報なんて意識があるのかどうか、これは震災をこうむった福島市ならではののかなと。あのときの状況を見ると、本当に福島市の広報というのはお粗末だったから、いろいろと問題提起は総務委員会でもさせていただいたところなのですけれども、あのときの総務委員会では、今言葉の皆様の意見のわずかな部分を捉えての意見でございますけれども。

(**土田 聡委員**) きょうは議論する場ではないけれども、1つ言いたいのは、危機管理の情報とか広報にしても、全てではないけれども、生活広報に集約されてくるのだよね。東日本大震災のときだって断水の情報、水配る情報なんていうのは常に生活広報と一緒にだったわけ。それ考えると、放射能の情報も考えていくと生活広報と一緒になのだよね。そういう意味では危機管理広報もある程度必要なところもあるし、生活広報の中に含まれるということ考えれば、やっぱり戦略1から3の中で広報の目的、目標を明確にする、これやっぱり戦略で考えると全て当てはまるから、そういうので考えていったほうがいいかなと思っているのだけれども。あのとき総務は俺と粕谷さんと、私あのときしゃべったけれども、福島市は断水の情報出さなくて何もできなかったの。

(**宍戸一照委員**) いつ回復しましたという話はあるけれども、いつごろ見通しという話はなかなか。

(**土田 聡委員**) それで、市民がホームページ上で出たという情報みんなが出していた。それを地図に落としていった。ここ出た、ここ出た、ここ出た、ここ出たと全部市民がみずからやっていった。そういうこともあったのだけれども、福島市は全く後手に回ってしまって、水出すほうに目いっぱいそこまで頭回らなかったというのがあったのだけれども、それでは広報戦略にならないから。そういうことも含めてやっぱり考えていかななくてはならないのは、一般化するというか、例えば危機管理で東日本大震災みたいな災害ではなくても一言断水だったり、火事だったり、いろんな状況も目標は一緒だから。どうやって知らせるかだから。それ考えると戦略の中でうまくやれるのではないかなと思うのだけれども。糸魚川の大火事だって多分広報戦略用いてやっていけば、どこまで広がったとか、

ここではこういうことやっているとか、いろんなことを迅速にホームページ上でやれたはずなのだけれども。

(小松良行委員長) 例えばただいまのご意見の中で危機管理広報というのは、福島市民にとっては生活情報とかこれまでの経験を顧みれば一部であろうということは当然みんな理解しているところでありますけれども、今の話ではないですけれども、震災のときの情報発信がうまくいかなかった、混乱を招いたとかということスポットライト当ててしまうと、また新たな広報戦略を今後見直していこうというところに我々意見を具申ししていく中で、それは教訓として大切なことではありますが、より今後に向けたというところにおいては、やはり福島市の魅力発信というところ、そして日々情報を、また地域のサービスについての理解を深めたり、市政だよりを中心とした、あと一部ラジオやテレビなんかもそうなのですけれども、生活広報の充実が今後大事になってくるというところから、決してこれをないがしろにするということではなく、生活情報の中で一部そういったことに、福島市の広報戦略の中にも広報の中に市民の放射線に対する不安の解消、それから風評払拭といったところもございまして、避けては通れないところかもしれませんが、スポットを当てる方向とすれば、小野委員からありました魅力発信していこうよということと、そして市民に対して市政あるいは住民サービスの向上に向けた情報をしっかりと周知すると。当然その中には危機管理といった部分での情報も含まれていますが、スポットの当て方として3つの方向でまとめていくことにはちょっといろいろな大変な、あとまとめていくにあたって結論が散漫になりそうな感じもしますので、何とかそのところはスポットの当て方として生活広報、そして魅力発信広報ということを中心に、目的の文章を読んでいただきますけれども、このように本市の広報の現状、目指すべき広報のあり方などということで、幅広くではありますけれども、スポットはこの2つにというふうなところでご理解いただければありがたいです。

(宍戸一照委員) この広報戦略の3ページの(3)のところに我々委員会として目指すべきものはこの福島市が持つ魅力を正確かつ効果的に市民のみならず国内外に発信し、観光という、このつなげていく広報を目指すというのがやっぱり未来志向の広報戦略というか、魅力発信方策を提言していくということが一つの目的だと思うので、今委員長おっしゃったような部分で、調査項目についても同じような文章で書いてあるから、提言という形になればそういうふうになるのかなと。その一環として先ほど来いろんな部分出ていますけれども、危機管理の放射能、これはあくまでも土田さんおっしゃったように我々市民にとっては日常の生活広報だから、それが定着しているわけですから、そういうものが逆により効果的に、例えば先ほど小野さんからあったように、ああいうふうな時間帯でなく、もう少し何か別な時間帯で周知できないのかと。東京での中づくり広告とか、そういうのはすごく最近熱心だけれども、スポットの時間ということは改善されないから、そういうところも市民に対する広報だと思うのだよね。そういうところを未来志向で提言していくということで、委員長のいらっしゃるところでいいのではないのでしょうか。

(小松良行委員長) 土田委員、どうですか。

(土田 聡委員) いいのではない。了解です。

(小松良行委員長) 粕谷委員、どうですか。そのようなことで、一番所管事務調査の案というところで、この目的でいいのかというところでの議論でございまして、ここは要らないけれども、ここを解消したらいいとか何か。ここを見ながら、戦略と対比しながら、私どもが目指すところというか、提言に持っていくところまでにどういう調査が必要かなということではご意見ありますか。

(粕谷悦功委員) いいと思うのだけれども、戦略のところの7ページ、8ページに広報媒体としては全部出ている、これ。メリット、デメリットというはあるのだけれども、結果的にはこういうものを使っていかにうまい広報をしていくかということになるのだけれども、さっき言ったテレビでの時間帯はお茶の間の一番みんなが見られるような時間帯とか、金も高くなるけれども、そういう内容があるのだろうけれども、なかなかこれ調査してどんなふうにとまとまるかというのは全部出ているのだ。広報媒体こういうのしか、基本的にはこうだという話になっているから。

(小松良行委員長) 媒体はそうです。どこに重きを置いていくのかとか、あるいはこういったところにこういう改善が必要だということもあるのですけれども。

(粕谷悦功委員) だから、こういうものを使うにしても、より有効な使い方をやっているような先例があるのかどうかとか、そういうのをやっぱりやらないとこれなかなか容易でないと思うのだな。

(小松良行委員長) これまでも小野委員からのお話の中にもありましたとおり、福島市は魅力発信といった点での情報戦略が弱いと。その点で先進事例などを見て地域の愛着をどう醸成していく取り組みをしているのだろう。例えば市のマークもそうですけれども、こういったシンボルマークについての考え方だったりとか、あとは福島市のやっぱり文化、それから風景、こういったものもこれまで以上に強化していくといったことだったり、歴史、文化もそうですけれども、こういったものをひっくるめて戦略としてプロモーションしていくというのが今後必要なことであろう。福島といえばモモが有名だとか、こういった食べ物も全国でもよく食べられているとかというようなことですが、やっぱり戦略的にプロモーションしていくという、これらをどう行政の中で位置づけてたくさん発信しているのかと。例えば福島ブランドというものを確立していくために戦略的な取り組みをどう構築していくかというところが福島は本当に弱いところであり、これから目指す広報戦略なのだろうなというような感じはしております、例えば流山市などは少子化に向けてということである程度目的を絞った戦略的広報を行っていたり、あとは岡崎市、岡崎ブランドの確立というようなことでやっている先進地区があったりとかということもありますことから、そうした方向性ということで、そのためには媒体としてということで、この広報の事業という中では、市政だよりとかさまざまありますがけれども、まずこの戦略を強化して、よりこういった発信媒体を活用してということで我々もそういった提言にだんだんなっていけばいいなというようなストーリーは描いたところだったのです。

(宍戸一照委員) 今粕谷さんがおっしゃった7ページ、8ページ、9ページの広報媒体です。広報媒

体見て、最近の福島市の広報というのはどっちかというインバウンドのための観光誘客ということでツイッターだ、フェイスブックだ、ユーチューブだ何だかんだと盛んに予算化をしているけれども、これは確かに観光誘客としての部分は有効かもわからないけれども、果たして生活媒体としてはそういうものがいいのかどうかという部分と、これらに全て対応、ツイッターだ、フェイスブックだとSNSに対応していくということはなかなか大変だなというふうに思うと、その辺の、あとホームページを吟味していく必要性は、時間的になかなか大変だから、短いから、無理かなと思うけれども、観光誘客がイコール広報媒体なのかなというふうに思うのです。観光誘客のために、インバウンドのために広報だ、広報だということを盛んに今福島市は言っているけれども、果たしてそれが本当の広報なのかなというふうにふとさっき、何だかんだというとき必ず外国人旅行者、外国人の観光客何だかんだという言い方ばかりするようになってきましたから。

(小松良行委員長) 今私も流山市のお話などしましたけれども、母親になるなら流山市なんていうインターネット開くと出てきたりしてしまして、なるほど、我々つい観光誘客、そちらのほうにばかり目が行って、あるいはそれが風評被害の払拭のためにみたいなことでどうしても力強く息んでしまいますけれども、今言ったように魅力づくり、あるいは魅力をしっかりと市民に向けて、周辺近隣に向けても発信していけるような手段も同時にやっぱり強化していかないと、要するに市民にとってみれば税金を観光業とか農業の人たちに向けていっぱいお金使っているなという、私たちに対してしっかりした情報下さいよと、そのための広報なのではないですかと言われると確かにおっしゃるとおりだと思います。

(宍戸一照委員) 対外的にも住みたくなるまち福島というような魅力発信をしていくという必要性は福島市の政策として必要だと思うのね。だけれども、SNSは主に福島市の場合観光誘客というほうにばかり向いているのかなと。だから、人口減少で住みたくなる福島というふうな魅力発信をしていく広報というものもやっぱり考えて地道にやっていく必要があるのではないのかなというふうに思うと、その辺まで範囲を広げていくとなかなかまとめ切れないのかなと思うのですけれども、あとは福島市の広報戦略、先ほど言った本家本元のシティープロモーションの考え方という部分になっていくとは思いますが。

(羽田房男委員) 私どもの会派ですけれども、広報広聴課は分けるなということを申し上げてきたのです。つまり広報というのは情報の伝達ではなくて、市民生活の向上のために、市民の福祉向上のためにどういうふうに、その目的のためにどういう手段をつくるのかというのが広報なのです。ですから、一方的に流すだけではなくて、きちんと聞けよと。市民の実態や思いも聞けよと。ですから、広報広聴課を広報と広聴を分けなくて1つにしてくれという要望を出したというのはそういうことなのです。全てにおいて市民生活の向上だったり、福祉の向上ということが目的で、その手段ですから、市民がどういう情報を求めるのか。市民生活に直結をしていくその情報によって福島市はこういう制度もあるのだということで、それを受けることによって市民生活が向上できると思うのです。ですから、

宍戸委員さんがおっしゃったように非常に枠は大きいのかもしれないですけども、市民生活の向上のために危機管理があったりとか、いろんな魅力発信とかとあるわけですから、ずっとぐるぐる、ぐるぐる回っても市民生活の向上だったり、福祉の向上になるための広報はどうかということと、よく議会答弁でいただくのはインターネットの情報媒体というのにも必要なですけども、市政だよりの中身も必要なのですが、どういうふうにも市民生活の向上のために情報を、一人一人といたら無理ですけども、大枠の方に提示をして、先ほども申し上げたとおり、それをお聞きしてまたやるということが非常に広報広聴課の魅力的なことだったのかなというふうにも思うので、一方広報ということなので、そういう意味で委員長のほうで出された調査目的というところで落ちつくとか、着地点がここなのかなというふうにも思いますので、ぜひ進めて。

(小松良行委員長) 広報、そして本当は広報広聴って広聴も大事なところなのではあります。もしこの調査を進めていく中において、市民の声というのはどのように反映されているのだとかといったところには、やっぱりこれは広聴機能ですから、どうしても触れていかなければしょうがないところでもあるのだと思うのですけれども、しかしながら余りそこばかり深掘りしていくと、ですからただ必ずそういった部分というのは絶対まとめの段階の中には入ってくるのではないのかなんていう気がします。これはやっぱりこちらが弱い。

(土田 聡委員) 広聴も出たから、私もいつだっけ、反対討論で部設置条例のときやったのだけでも、余り広聴のことに触れると私も言いたくなるから広報で所管事務調査やって、まとめのところ広聴も必要だということももちろん出てくるのはそれはそれでいいと思うのですけれども、そのあたりどうかやっていかないと、私反対することになる。

(小松良行委員長) 例えば視察先などで当然広報広聴課なんていうところが出てくる可能性はありますよね。そうなってくれば、ついでにそっちのほう聞きながら、やっぱりここの連携というのにも必要ですよなんていうようなところを聞いてくることも可能になるかもしれませんけれども、あくまで今言ったスポットの当て方で、たまたまそういういろんな情報ある中で、やっぱり必要性の中でぽろぽろ出てくるというのは非常に理解できる場所であろうかというふうにも思っていますけれども。

(土田 聡委員) 大体今の流山市もそうだけれども、市がみずから育てやすいまちですなんて言ってもこれは人來ないのだ。そんなの信じられないと言って。ところが、一般のほかの市民がそう言うとうわっと広がる。つまりインフルエンサーをどの程度広げられるかなのだよ。それが魅力ある都市づくりにしても生活情報にしても何でもそうだけれども、インフルエンサーをどうやって広げるかというところが広報戦略のポイントになってくるのだよね。市みずからが余り声高く言ってしまうとうそつけなんて言ったり、本当かよなんていう感じで言われるから。

【「そう思わないけど」と呼ぶ者あり】

(土田 聡委員) そこまでは思わないかもしれないけれども、疑問視する人が出てくるのだ。ところが、一般市民の人が普通に発信していくと、なるほどと言ってそこに乗かっていく人がいっぱい出

てくるから、そういうことも含めて魅力ある都市づくりとかなんとかもやってみて。

(小松良行委員長) それでは、いろいろとご意見をいただいたところですが、この資料1の所管事務調査についての案についてはおおむね皆さんのご意見をいただいたということで、また調査の過程の中でさまざま、いろいろ来る中では、今言った危機管理広報もそうですし、またあとは広報広聴というような部分の調査もあるのではないのかというご意見もいろいろ踏まえながら進めていければというふうに思っておりますけれども、それでは調査について皆さんのご議決をいただかなければなりませんので、この案どおり進めさせていただいてよろしゅうございますか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(小松良行委員長) ありがとうございます。

続いて、そういたしますれば当局説明を伺わなければならないので、そのために当局説明に関する調査の内容案というのをちょっとお示しさせていただければと思うのですが、準備しておりますので、配付いたします。

【資料配付】

(小松良行委員長) なお、先ほど調査期間がちょっとあれでしたが、説明不足で。平成30年7月から調査終了の時期までとざっくりとさせていただいておりますけれども、できればそんな6月定例会議までひっぱらないで、なるべく淡々とやって3月定例会議中くらいに終われば一番いいかな。6月になっても構いませんが、なるべく目標は3月末で報告できるようなスピード感を持って進められればと。

今お手元にお配りしましたけれども、日程、日時について、まずは調査内容について、このような聴取する内容についてですけれども、(1)番、本市の広報政策についてということでこの戦略についてをお尋ねし、広報課の業務として広報戦略会議、この中にもございましたけれども、皆さんもご存じだと思いますが、次長クラスでもって広報戦略会議を行ってというようなことで、こちらの広報戦略、この5ページのところの戦略3というところにあるかと思います。どのくらいこれ進捗しているのか、どんなこと今までやってきたとかって多分余りやっていないのではないのかなと思うのですが、まだ。取り組みはこれから、こういうことをお尋ねをしていって、あと本市のシティープロモーションに取り組むということで、今後の計画ということで、主に(1)、(2)ということの中身でもって当局のほうに聴取をさせていただければというふうに考えております。

(宍戸一照委員) (2)の本市のシティープロモーションに係る取り組みについてというふうに書いてあるのだけれども、シティープロモーションとなると大きな福島市の部分なので、ここに広報戦略というような意図を入れない、広報戦略というか、こちらの調査目的にもあるけれども、魅力発信の部分を入れないと、シティープロモーションとなると当局も魅力発信広報、シティープロモーションとしての3番目の(3)にあるような魅力発信広報、つまりシティープロモーションの一環としてというふうな形で入れないと、シティープロモーションそのものになればこれはまちづくりとか、そう

いうのまで含んでくるので、大きくなるのではないのかなと思うのですけれども。

(小松良行委員長) おっしゃるとおりです。くり方が本市の広報政策と、そして魅力発信広報、括弧としてここにあるようなシティープロモーションの一環としてというふうなくくりでの取り組みを伺うということで、ここ魅力発信広報という言葉(3)をそっくりいただいて、この(2)にそういうような内容にすれば今のような形になって。

(宍戸一照委員) 広報という分野での話が聞けるのかなと思うのですけれども。

(小松良行委員長) 魅力発信広報、シティープロモーションの一環としてと、に係る取り組みについてというふうに読みかえていただけるといかがでしょうか。いかがですか、皆さん。魅力発信広報、シティープロモーションの一環として、に係る取り組みについてというふうにすればどうですか。そうですね。おっしゃるとおりだと思います。

(粕谷悦功委員) 2番目、魅力発信広報という、シティープロモーションのいわゆる広報活動という限られた内容になるのだな。魅力発信広報というのは、シティープロモーションとしての広報でしょう。生活広報と福島市独自の魅力発信広報と2つのパターンあると思うのだな。魅力発信というシティープロモーションだけの外向け発信ということの内容になってしまうと思うのだけれども。市政だよりのあり方とか、生活広報というのは市政だよりとか、あるいはSNS使ったりしての市民向けの情報発信、広報活動と、あとはこれは福島市の魅力を対外に発信する広報と、この2つのことを調査するのではないの。これは、魅力発信広報というのはシティープロモーションのかわり言葉になってしまうのだけれども、そのことだけを調査するような内容になる。別にこれでも構わないのだけれども、これでいいのかい。

(土田 聡委員) これは、例えば今回の6月定例会議に出た補正予算の中身について具体的に調べること。ではなくて。今粕谷委員がおっしゃった一般的なこと。シティープロモーション。

(小松良行委員長) 一般的なシティープロモーションとはということは大体理解されているところではありますけれども、それに対する本市の取り組みということを聞くことになってくるわけですが。

(土田 聡委員) 補正予算にもかかわっているわけですね。

(小松良行委員長) はい。

(粕谷悦功委員) だから、これは本市からは福島市の魅力発信の、福島市のいいところ、例えばいで湯とくだもの里ふくしまとか、そういう情報発信とか、あと風評被害でいろいろあるけれども、そういう内容の情報発信とか、こういうものについての広報のあり方ということの調査ということに限定されてくるように思うのだな。これは外向けの、先ほど言っているように、それは外に福島は安全安心になったよと、観光客の皆さんもこういういいところあるのだ、来てくださいということの広報活動なのだけれども、市民に対する広報活動のあり方、この内容も課題はあると思うのね。市政だよりにだってもっと考えろとか。

(羽田房男委員) 私が先ほど申し上げているのは、市民の生活の向上、福祉の向上のための広報だか

ら、福島の魅力発信するのだとか、観光だとかなんていうのは、それはそれで必要なのでしょうけれども、課題はそうなってしまうとずっこけてしまうのではないかなというふうに思うのです。シティープロモーションなんていうと東京の120万円だか何だかでやるような、そういうのとかSNSとか何とかかんとかなんていう、そういうもので発信するのが今の時代の最先端いつているみたいな、それは錯覚ではなくて、現実には広報というのは何のために必要だと、福島市に生まれて、福島市に育って、そして死んでいくのだという、そういう言葉どおりに福島市でよかったのだよ、こういう生活が向上してきているのだよという、そういうところの魅力を発信することによって移住、定住、福島市に来てください、福島はこんないいところなのだよという、そういうことなのではないのかなというふうに思うのです。それは、何といても福島市民がここに住んでいて、やっぱり福祉が向上したり、生活が向上しているのだねという実感とその発信ではないのかなというふうに思うので、余り広げると本当に1年あってもまとまらなくなってしまうような気もするのですけれども。申しわけないです。

(小松良行委員長) 大きく2つに、(1)、(2)というような取り組みにしましたけれども、並列的に(1)、(2)としましたけれども、本市の広報政策についてで戦略をまず聞くことで、あとは広報業務についてを聞くこと、そして広報戦略会議ということあるのですが、特出ししなくてもシティープロモーションのというか、シティープロモーションと言うとあれですから、魅力発信広報、シティープロモーションの取り組み状況とか、そして今後の計画とかということを並列に聞いていけば特段問題、書き方はこうなっていますけれども。まずは現況を聞くというところですので。

(粕谷悦功委員) だって、広報政策は魅力発信広報だって、生活広報だって、危機管理広報、全部入っているのでしょうか、ここには。

(小松良行委員長) 広報戦略の中に全部まとまっていますから、このようになっていますけれども。

(粕谷悦功委員) ここで、みんな入っているのだから、あえてここだけ取り上げてまた聞くというふうになると、生活広報と例えば魅力発信の広報についての取り組みとかというようなことにしないと、何となく。全体論で言っているのだったら何も要らない話なのだけれども。

(小松良行委員長) ありがとうございます。

では、この聴取する内容は、まず広報戦略についての概要についてお尋ねをしますのでけれども、主に具体的な事業の中身をお示しいただきながら、生活広報と魅力発信広報を重点にお伺いしていくというような聴取内容に改めさせてもらうということではいかがでしょうか。

(粕谷悦功委員) それがいいのではないの。市民への広報と外部への広報という感じなのだろうな、本当は。市民への広報のあり方と、あと福島の魅力を発信する広報のあり方というのかな。

(宍戸一照委員) 今粕谷さんがおっしゃったことも、これ本市の広報戦略について聞くと全てを聞くことになるのだけれども、委員長の気持ちを推測すると、特出しとして、今本市の課題としているシティープロモーションについて特にそのところも聞いてみたいというふうな思いでこれを書いたわけでしょう。

(小松良行委員長) スタートラインが小野委員からシティープロモーションというような意見しかなかったものですから、これは特出しせざるを得ない。

(宍戸一照委員) その辺皆さんの意見もあれなのだけれども、委員長として、私としてはそのところも聞いてみたいなというような委員長の気持ちも皆様にお伝えする必要性もあると思うし、あとこの(1)で本市の広報戦略についていろいろ聞くわけだから、そこで質疑もあるのでしょうか。

(小松良行委員長) はい。

(宍戸一照委員) だから、特にここの部分の(2)の部分については、本市の魅力発信の広報でシティープロモーションと生活広報というふうな部分で日常生活というか、そこら辺の部分というような特書きとしてこれまでの取り組みについての部分を聞けばいいのではないの。

(小松良行委員長) ありがとうございます。では、(1)、①の中の広報戦略の中においての中なのですから、今言った生活広報と、それから魅力発信広報、その中にはシティープロモーションも入ってまいりますけれども、むしろ表題が本市の広報政策についてという調査ですから、その中で戦略全体について、特にその中に、本当だと①ではなくて(1)になって生活広報、それから魅力発信広報、そして広報業務についてと戦略会議の実績などというようなことになってくるのですか。

(粕谷悦功委員) だけれども、ここで本当にシティープロモーションだったら、今度は広報政策に関する調査ではなくて、福島市の魅力発信のあり方についてとか、シティープロモーションはどうあるべきかとかいうことにしてしまえば本当はいいのだけれども。

(小松良行委員長) どうしてもこういう書き方すると何となくこれだけ別々に聞いていくようなことになりますけれども。

(宍戸一照委員) 聞いてみたいという気持ちはわかるけれども、今の福島の魅力発信政策についてと、魅力発信の広報に係る取り組みについてというふうに、シティープロモーション消して、あとは委員長の口から当局にはシティープロモーション、魅力発信の対外的な部分と、シティープロモーションというから、あれなもので、対外的な部分と、日常的な、市民におけると、その2つをメインに聞きたいのだと言えればあれでしょう。シティープロモーションと書くから限定される感じになるから。

(小松良行委員長) ただいま粕谷委員、そして宍戸委員のほうでまとめていただきましたけれども、そのようなことに調査内容を、内容といってもそういうことなのですから、書き方をちょっと改めて題目を変えさせていただいて、これでもって次回当局に対する説明を賜るようになりたいと思いますが、いかがですか。よろしいですか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(小松良行委員長) では、直したところの文章これから書記のほうと直しますけれども、今ここでなくてもいいですよ。後ほど皆さんにちゃんとお渡しできるように早急にこの後対処してまいりたいと思いますけれども、そのように調査内容についてということでの案は改めさせていただきまして、後日皆様にお届けできるような方法にしたいと思います。

では、そのようなことで改めさせてもらったもので進めさせていただくということによろしゅうございますか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(小松良行委員長) 正副のほうからは以上ですけれども、このようにさせていただきますことで終了したいと思います。

午後 4 時18分 散 会

総務常任委員長 小松 良行